

## 神奈川県下の縄文式土器

神 沢 勇 一

神奈川県下においては、縄文式土器の様相が東半部と西半部とではかなり異なっている。すなわち相模川付近をおおよその境として、東半部の土器は南関東地方一般の場合とほぼ同様な特徴と変遷を示しているのに対し、西半部では東海地方的な要素がつよく、むしろ東海地方的な土器が主体的に存在すると言ってもよい状態である。弥生式土器にみられる相違と同じく、それが2個の文化圏の存在を反映するものである可能性がつよい。いまのところ資料が不十分なため具体的に説明しがたいのでここでは今後の問題として一応指摘するに止め、とりあえず県東半部——東京湾沿岸地域——の編年（P. 5 参照）により、各時期の概要を説明することにした。なお、編年表中に太字で表示したのは県下に標式遺跡が存在する型式である。

### 早期

大丸式土器から茅山上層式土器までの13型式があるが、器形と文様の基本的特徴から、撫糸文土器群、無文・沈線文土器群、条痕文土器群の3群に区分できる。撫糸文土器群<大丸式土器（図版1—1）、夏島式土器（図版1—2・3・4）、稲荷台式土器（図版1—5、2—1）、大浦山式土器（図版2—7）>は縄文、撫糸文を付けた尖底土器の一群である。時期が降るに従って文様が簡略化され、器体も尖り気味になる。稲荷台式土器から器形が分化するきざしがみえるが、顯著ではない。なお、当初の大丸式土器は、本県下では井草式土器を伴出しており、両者は分布を異にする存在とみられる。無文・沈線文土器群<平坂式土器、三戸式土器、田戸下層式土器（図版2—9）、田戸上層式土器>では、器形の分化が認められ、ごく小型の土器（図版2—2～6）が現われる。一方文様も沈線文土器群では、沈線文のほか刺突文、貝殻文、隆線文など新しい要素を加えて多彩になる。またこの段階では押型文土器の伴出が知られている。つづく、条痕文土器群<子母口式土器、野島式土器（図版3—1）、鶴ガ島台式土器（図版3—2）、茅山下層式土器、茅山上層式土器（図版4）>は貝殻条痕文が盛行し、胎土に纖維が混入されて器体が大型化するほか、後半では平底が現われるなど著しい特徴をもつ一群である。このうち、茅山上層式土器には粕烟式土器あるいはその影響を受けた土器（図版3—3、4—2）が伴い、また横浜市・紅取遺跡では入海II式土器（図版2—4）が主体的に存在したことなどから、伊豆以西の土器との関係が問題となっている。

県西半部——相模湾北西部沿岸地域——では、早期の土器の発見例はきわめて少なく、擦痕のある無文土器や橢円押型文土器が散見されるにすぎず、後者が伊豆半島付近の土器と類似している以外は明らかでない。

### 前期

この時期の資料は、東京湾沿岸地域でも鶴見川流域では比較的豊富であるが、三浦半島その他においては少ない。前期の土器は、前半の諸型式<花積下層式土器（図版5—2・3）、関山式土器、黒浜式土器、水子式土器（図版5—1・2）>では、胎土に纖維を混入しており、早期末の土器からの伝統がみられるが、文様では縄文が再び盛行し、平底が一般化するほか、上げ底が現われる。縄文は

羽状繩文が目立ち、斜行繩文、竹管文、貝殻文等を単独または組合わせて構成している。器形では波状口縁が多くなる。なお、花積下層式土器には中部地方の木島式土器が少量伴出するが、早期末における粕畠式土器や入海II式土器の伴出と関連があろう。

後半の土器<諸磯式a土器(図版5-1・2)、諸磯b式土器(図版5-6)、諸磯c式土器、十三菩提式土器>の資料は多いのであるが、本集成には、都合で僅かしか図示できなかった。諸磯a式土器以後は胎土へ纖維を混入することは行なわれない。器形は鉢形以外に、浅鉢形や壺形がみられ、文様では竹管文が盛行し、十三菩提式土器では細隆線の上に半截竹管を押し引きした結節隆線文、三角沈刻文が特徴的である。鉢形土器の口縁には、しばしば獸面把手が付く。

県西半部では、酒匂川流域に幾つか遺跡が知られている。完形土器の例はないが、伊豆半島付近に分布する上ノ坊土器に類似するものがあり、また東京湾沿岸地域の諸磯式土器の一群に近似した土器も認められるけれども、細部においては、かなり相違するところがある。

### 中 期

五領ガ台式土器から加曾利E III式土器までの諸型式の場合も、県東半部と西半部とでは相違があるが、場所によっても、そのあり方に差が多少みられる。たとえば、中期初頭の五領ガ台式土器は県東半部には少なく、むしろ県西半部に分布するらしい。勝坂式土器は東京湾沿岸付近では阿玉台式土器を伴出するが、内陸部では阿玉台式土器は伴出せず、全体として、中部高地方面の土器との関係がつよいと言える。

中期においては、器体が一般に大型化し、器壁は厚い。文様は、五領ガ台式土器には三角沈刻文その他に十三菩提式土器からの継続がみられるが、勝坂式土器(図版6-1~3・5、6-3・6)では隆線文が著しく発達して複雑な構成を示し、前期的な要素を止めない。隆線文による装飾は、加曾利E I式(図版7-4・5)、加曾利E II式(図版8-1~3、15-10)、加曾利E III式と移行する間に次第に簡素化していく。中期においては、鉢形、小型鉢形(図版8-4)、筒形、浅鉢形(図版12-1~3)、釣手形等の器形があるが、器形の分化はさほど著しくない。鉢形土器のうち、口縁に人面把手や獸面(蛇形)把手を付け、特殊な用途を考えさせるもの(図版6-4)もしばしばある。なお、図版7-6、図版8-3は他地域の系統をひく土器の例として挙げた。前者は中部高地、後者は東北地方(大木II式土器)と関係を有するものであろう。

### 後 期

県東半部では、後期の資料はかなり豊富である。時期的には称名寺式土器(図版9-1~4、12-5)から加曾利B III式土器までの諸型式の資料(図版9-5、10、11-1~4、12-6~7、14-5・6、15-1~9・11~14)が多い。また三浦半島においては、安行I式土器、安行II式土器はほとんど発見されていない。

後期の土器は器形、文様とも纖細な感をもち、器壁は薄い。鉢形、浅鉢形、壺形、注口形、高坏形等の器形があり、とくに鉢形土器では精製土器と粗製土器が分離し、器形の分化が明瞭になる。同一型式内の同種の土器でも、大きさや、各部の形状の変化が少なくない。文様は磨消繩文を中心に構成されているが、おもに精製土器の場合であって、粗製土器(図版10-6・8・9等)には粗い範描き沈線や繩文を加える程度にすぎない。なお、精製土器には化粧粘土の使用がみられる。また、図版15-5に示した四脚付きの注口土器、図版15-9の四耳をもつ蓋付壺形土器、図版14-5・6の高坏

形土器のような特殊な器形をとる例が現われる。

県西半部、とくに酒匂川流域および周辺では、静岡県・天王山遺跡出土土器の古い部分に類似した土器に、少量の南関東地方的な土器が伴っている。知られている資料の大部分が破片ではあるが、個体数においては圧倒的多数を占める。図版10—3に示した小型深鉢土器は、適当な例とは言えないが一応、その資料としてとりあげたものである。

### 晩期

晩期の土器については全体に資料が少ない。とくに県東半部では、杉田式土器（図版14—1・2）以降のものはほとんどと言ってよいほど知られていない。器形の種類は後期と同様であるが、精製土器と粗製土器の別は、よりきわどっており、精製土器では東北地方の亀ガ岡式土器（大洞b式～A'式土器）の影響を受けたものや、移入品と思われる例が知られる。

県西半部の場合も、資料にとぼしい点では同様であるが、東海地方的な土器——静岡県・天王山遺跡出土土器や愛知県・吉胡貝塚出土土器——に相応するもの（図版11—5、14—3）がみられ、これに亀ガ岡式の系統をひく土器（図版14—4・7）が伴なっている。資料的には必ずしも十分ではないが、東京湾沿岸地域（県東半部）と相模湾沿岸地域（県西半部）の土器に基本的な差があることはほぼ確実であろう。次の弥生式土器が、大体これらの地域に、別個の文化圏をもって存在することとの関連において、両地域の縄文式土器の相違は特に重要な意味をもつと言えよう。

## 編年表

時 期	型 式	標 準 遺 跡
早 期	井 草 · 大 丸	東 京 都 杉並区 新町・井草
	夏 稲 荷 浦	横 浜 市 南区 六ツ川町・大丸
	大 平 三 田	横 須 賀 市 夏島町・夏島
	戸 下 上	東 京 都 板橋区 7丁目・稻荷台
	子 母 口	三 浦 市 南下浦町 松輪・大浦山
	野 島 島 台	横 須 賀 市 若松町・平坂
	鶴 ガ 島 台	三 浦 市 初声町・三戸
	茅 山 下 層	横 須 賀 市 公郷町・田戸
	茅 山 上 層	"
		川 崎 市 千年・子母口
前 期	花 積 下 層	横 浜 市 金沢区 野島町・野島
	関 山 浜 子	三 浦 市 初声町・鶴ガ島台
	黒 水 諸 諸	横 須 賀 市 佐原・茅山
	磯 磯 磯 a	"
	b	
	c	
中 期	十 三 善 提	埼 玉 県 春日部市・花積
	五 領 ガ 台	埼 玉 県 南埼玉郡 蓼田町・関山
	勝 坂 · 阿 玉 台	埼 玉 県 南埼玉郡 蓼田町・黒浜
	加 曾 利 E I	埼 玉 県 入間郡 富士見町・水子
	加 曾 利 E II	三 浦 市 三崎町・諸磯
	加 曾 利 E III	"
後 期	称 名 寺	川 崎 市 野 川 · 十三菩提
	堀 之 内 I	埼 玉 県 平 塚 市 金目村 広川・五領ガ台
	堀 之 内 II	相 模 原 市 新磯・勝坂
	加 曾 利 B I	千 葉 県 千葉郡 小見川町 五郷内・阿玉台
	加 曾 利 B II	千 葉 県 千葉市 加曾利町・加曾利
	加 曾 利 B III	"
晚 期	加 安 行 行	"
	I	埼 玉 県 千 葉 県 川口市 領家・猿貝
	II	"
	安 行 III a	横 浜 市 横 浜 市 埼 玉 県 岩槻市 柏崎・真福寺
	安 行 III b	"
	安 行 III c	"
	安 桂 杉 荒	横 浜 市 戸塚区 公田町・桂
		横 浜 市 磯子区 杉田町・杉田
		千 葉 県 成田市 荒海字根田・荒海